

1945年6月18日未明、浜松大空襲が始まった。数十機のB29による焼夷弾爆撃で、浜松市の中心部はほぼ壊滅した。死者1,157人。

当時はまだ幼かったが浜松大空襲を体験した男性に聞く。

東側の窓ガラスが明るく、真っ赤に染まっている。僕は一瞬、火事だと思った。「火事なの？」と母に聞いたが、母は答えず、僕の手を引っ張って戸外へ出た。

我が家から数十メートル先の斜面にあった防空壕に入ると、中にはすでに大勢の人たちが入っていた。中の方からガヤガヤ話し声が聞こえる。もちろん、中は真っ暗だった。

自宅で聞いた「ドーン、ドーン」という音が、次第に近づいてますます音が近く、大きくなった。この防空壕の近くにも、爆弾が落ち始めたようだ。

壕の奥の方から盛んに、念仏を唱える声が聞こえる、その夜は、いつまでも爆撃の音が鳴りやまなかった。防空壕の中は、人がいっぱい座ることも寝ることもできず、立ったまま一夜を過ごした。

壕の外へ出ると、辺りは早朝の薄暗がりに包まれていたが、見渡す限り、全くの焼け野原であった。煙がくすぶっていた。

その後、中瀬村（現浜北区の北東部）の親戚に疎開して行くことになる。中瀬村でもアメリカの艦載機に襲撃された日本の輸送機が、私の家の300m南東の河合家の庭に落ちてきたり、銃撃されたことをよく耳にした。又、大空襲の時は浜松の方角が真っ赤に見えたと言った。